■「ちくま評論入門」解説――読解問題への過程

22　藤田省三「松に聞け　現代文明へのレクイエム」

●参考　藤田省三『全体主義の時代経験』【309/F3/1】（北野高校図書館）

■目標　〈昭和の文体〉と思考にふれる

■追跡

①　一九六三（昭和三八）年に乗鞍岳に上って行く自動車道路が作られた。いうまでもなく「観光施設」として「開発」されたのである。嘗ての「山」は恐れを以て仰がれ、敬意を以て尊ばれる存在であった。近づくことの困難、その中に生ずる様々な不測の事態、そして水源地として、又材木や燃料や木の子の宝庫として私たちの生存を保証してくれることの有り難さ。墓場であり他界であると同時に社会の保護者であり発生の源泉でもある、その両義性の持つ不思議さは私たちの畏敬の念を駆り立てずには措かなかった。

「山」とは何か。①恐れと敬意の対象②（恐れ）近づくことの困難、様々な不測の事態、墓場、他界③（敬意）水源地、材木、燃料、木の子の宝庫、社会の保護者、命の源泉。

問題提起は、その「山」が「開発」されたという事実。「開発」は何をもたらしたか？

これが本編のモチーフだろう。

②　しかし、その「山」――しかも「山」の中の「山」としての「岳」（タケ）すらもが一個の「施設」と化したのである。しかも安全で「楽しい遊園地」の延長物へと変質したのであった。「山」の歴史はかくて終わった。そして「山の前史」の終焉は、山を経験の相手として持つことによって形造られて来た私たち人間の感覚の世界に構造的な終焉をもたらしている。そのことの一つの現れが、厳しい存在に対する感受性の欠落であり、さらに正確に言えば厳しさと優しさの両義的共在に対する感得能力の全き消滅である。優しさはひたすら優しいだけの微温性の中にしか発見されず、厳しさは唯々（ただただ）機械的秩序に基づく強権的命令の中にしか見つけることが出来ない。――という感受性の単元化が、今、史上初めて全般的な規模で発生している。**読解問題1**外界と他者に対する受容器が根本的な損傷を蒙ったのである。そのことを証明する証拠が欲しいならば、先ず自らを省みよ。自らの生活様式の実態を省察せよ。そうしてその営みの延長線上に発生する世界への新たな認識こそが、感受性の構造的回復をもたらす第一歩に他ならないであろう。何故か。次に示す小さな一例を見られたい。

濃厚な文体でしょう？　京大が好みそうな。濃く、かつ、鋭利。息づくような力があって、訴えかけてくる文体。心配無用。丹念に追えば、かならず応えてくれる文体でもある。

山の遊園地化がもたらしたものは、人間の「厳しさと優しさの両義的共在に対する感得能力の全き消滅」だと藤田はいう。厳しさとやさしさを共に持つものの例が山である。人間はそれに対して、恐れと敬意の入り混じった、文字通り「畏敬の念」を抱いてきた。――「開発」の時代、それが消滅した。「畏敬の念」が消滅したからこそ、畏敬の対象であったはずの山にブルドーザーを入れることができるようになったわけである。

「畏敬」は、「ひたすら優しいだけの微温性」への埋没と「機械的秩序に基づく強権的命令」への服従に分離した。なんと鋭い分析であることか。

このとき「山」は一つの事例である。山だけではない。自然、人、社会、さまざまな環境に対する感性が変化したのである。

「やさしさ」の原理は、芹沢俊介の「イノセンス」や、鷲田清一の「つながりとぬくもり」が説く現在の私たちの心理構造を予言している。藤田は、芹沢や鷲田より二十年ばかり年長である。高度経済成長と共に育った芹沢や鷲田と比べて、藤田らの世代は、経済成長の戦後をまたいで、時代の変化を見定める位置にいた。

また、「強権への服従」が社会問題化している現在の視点から見ると、その根はここにあったのか、と気づかされる思いがする。

読解問題1　「外界と他者に対する受容器が根本的な損傷を蒙ったのである」とは、どのようなことか。「両義性」という語に関係づけながら説明せよ。

傍線部とダイレクトに対応するのは、「山を経験の相手として持つことによって形造られて来た私たち人間の感覚の世界に構造的な終焉をもたらしている」という部分である。山地を背骨として構成されるこの列島に住む人間の感覚は、山に代表される自然に対する恐れと愛を生んできた。①段落にあったとおりだ。それが壊れた。

問いは、両義性が壊れたことを示せ、といっているので、何が壊れたのかを具体的に記述することになる。その内容はもちろん、傍線部直前、

「厳しい存在に対する感受性の欠落であり、さらに正確に言えば厳しさと優しさの両義的共在に対する感得能力の全き消滅である。優しさはひたすら優しいだけの微温性の中にしか発見されず、厳しさは唯々機械的秩序に基づく強権的命令の中にしか見つけることが出来ない。――という感受性の単元化が、今、史上初めて全般的な規模で発生している。」

にある。

「受容器が根本的な損傷を蒙った」に対応するのは、「感受性の単元化が、全般的な規模で発生した」である。「感受性の単元化」とは、「厳しさと優しさの両義的共在に対する感得能力が全く消滅」し、「優しさはひたすら優しいだけ」、「厳しさはひたすら厳しいだけ」に分離したことを意味する。

構文を設定しよう。

これまでこうだったのが、こうなった。感受性の変化として描く。

解答例１「これまで山をはじめとして、外界や他者に対して、恐れと敬意の両方を同時に感じていた人間の感受性が完全に壊れてしまい、ただ厳しいものに厳しさだけ、やさしいものにやさしさだけを感じることしかできなくなってしまった、ということ。」

解答例２（短縮）「これまで外界や他者の厳しさと優しさを同時に受け入れていた感受性が完全に壊れてしまったということ。」

筆者はしかし、感受性の回復の可能性＝一つの主張を提示している。「自らの生活様式の実態を省察せよ。」と。さて、その解答やいかに？

③　一九六三年の乗鞍岳自動車道路の「開発」は当然のことながら多くの生物を犠牲にした。その犠牲の一つに「ハイマツ」と呼ばれる高山地帯固有の松の木があった。岩山の固い瘠せ地に根づいて岩面を「這う」ように生きている、その木の姿が「ハイマツ」という名前の由縁であったが（その木のその名前を「這松」と書いたのは元文元年坂本天山が著した『駒ヶ岳一覧之記』であった）、その生きる姿勢が示しているものは、厳しく苛酷な条件と、その条件に貫かれながら屈服するのではなくて粘り強く成長していく、その木の生き方であった。細い枝は柔らかく密に混み合って四方に低く低く拡がっているが、その典型的な「低木」の形と質はどこから来たのか。観光客には分からないであろうし、己の欲求の充足しか考えない自我主義者にも分からないであろうが、注意をそこに（他者の生存条件に）集中することの出来る者ならば、容易に見て取れることは、斜面を匍う低いその形が高山の強い風圧と冬季の厚い積雪の加重という外的条件への抵抗を秘めた対応である。その証拠に風の当たらない所のものには「立つもの」もある、とさえいう。そうして枝の柔らかさは風圧と積雪の二重の圧力を吸収し飲み込みながら「従いつつ逆らう」生き方を保証するものであった。しかしその生き方は絶えざる逆境を内蔵しているが故に、順調な環境の中で我儘一杯に育った者とは違って、肥え太ることも出来ないし、高く聳え立つことも出来はしない。幹すらもが細く、しかし、しっかりとしている。どのようにであるか。その点を精密に調査し観察した人がいる。樹齢と幹の直径と年輪幅とを計測したのである。しかしその計測はその木を伐採することによってなされたのではない。自動車道の開発の犠牲とされたその木を一本一本集めてその悲惨な屍体の解剖として行われたのである。**読解問題２**それは一つの葬いであった。

対比に注目して、主旨を読み取ろう。

「開発」が破壊したものとしての「ハイマツ」。その「ハイマツ」の意味することは何か。

▼「ハイマツ」という〈他者〉の生き方に気づく者と気づかない者との対比。

・観光客や自分の欲求の充足しか考えない自我主義者にはわからない。（風景しか見ない者、自分しか見ない者）

・〈他者〉の生存条件に意識を向けることができる者は気づく。（他者に注意を向ける者）

▼ハイマツの形と質はどこから来たのか

・低さ＝風圧と積雪の二重の圧力への抵抗

・柔らかさ＝風圧と積雪の二重の圧力の吸収　→　「従いつつ逆らう」生き方

読解問題２「それは一つの葬いであった」とはどのようなことか。

☆比喩の言い換え。具体的な内容については、**☆傍線部延長＋指示内容**で補う。しかし、比喩表現の説明のときは、もう一つ、ここなら「葬い」という語そのものが示すことを考えておかなくてはならない。「弔い」「葬い」とは何をすることか。

一つは、遺体を整え、火葬や埋葬へいたる過程である。また、死者に別れを告げ、冥福を祈り、かつ、生前を偲び、残る者がその生の意味を反省する機会である。

さて、「それは」の指示内容は、

「自動車道の開発の犠牲になった、その木を一本一本集め、その悲惨な屍体の解剖として、樹齢と幹の直径と年輪幅とを計測した」ことである。

この行為と「葬い」の重なりを説明しなければならない。①犠牲になった木を一本一本集める＝遺体をていねいに扱い埋葬の準備をする、②木を解剖して樹齢と幹の直径と年輪幅とを計測する＝死者の生き方を敬い、それに学び、残った者の生に生かす

構文を考えよう。**☆切り身の方法**、でいい。「それは／一つの葬い（のよう）であった」と分解して、それぞれをいいかえる。「ということ。」をつける。

解答例「犠牲になった木を一本一本集め、樹齢と幹の直径と年輪幅を計測する行為は、遺体をていねいに扱い、死者の生き方を敬い、それに学び、残った者の生に生かそうとしている点で、葬いのようである、ということ。」

④　信濃教育会に属する名取陽、松田行雄の両氏の丁寧な調査によると、標高二五五〇メートル地点で犠牲にされた九十五本のハイマツの平均樹齢は驚くなかれ一〇九年、そしてその平均直径は七・九八センチメートル、一年毎の成長を示す年輪幅の平均は〇・三七ミリメートルであった。一年に一ミリの三分の一強ずつ一〇九年間成長し続けたのであった。標高二六五〇メートル地点でも九十八本のハイマツが殺害されていた。その平均樹齢は一一〇年、その平均直径は五・六八センチ、一年毎の平均年輪幅は〇・二六ミリであった。標高二七五〇メートル地点での六十一本のハイマツは、平均樹齢七七年、平均直径五・六二センチ、平均年輪幅〇・三七ミリであった。

この事実は確かに衝撃的である。百年間、一年に三分の一ミリ。風雪に耐え、風雪を吸収し続ける生のあり方。一方、それを、短時日のうちに「殺害」し、廃棄物としてしまう現代という時代。

筆者はただ「自然を大切しよう」というような気の抜けた標語を持ち出したいのではない。ハイマツであれ、絶滅危惧種であれ、たとえばそれを「観光的」観点から保護しようというような精神（というより「気分」）に対しては、怒りに近いような抵抗を示すことだろう。失われたのは、一つの精神である。

⑤　この計測結果が物語っているその木の生き方は私たちの胸を衝くものがある。少なくとも私にはそうである。何という遅々たる歩み、そして何という粘り強さ、百年にもわたって決して歩みを停めないその歩みの力強さ、比喩ではなくて文字通りの「風雪に耐える」辛苦を重ねて生き続けて来たその精進の厳しさ、そしてその柔軟な我慢強さ。外面的に高く聳え立つものでないだけに一層、それらの「隠された次元」における実質的特徴は気高い品位をもって私たちの前に立ち現れる。

木の生き方に重ねられている、人間の生き方。

⑥　いうまでもなく一九六三年の乗鞍岳開発は高度成長の所産であった。それが含む経済学的含意は、「第三次産業」の国境の飛躍的な拡張であり、それに伴う土木産業と土木機械業の新たな急成長であり、「行楽人口」と「行楽距離」の増大がもたらす消費活動の急膨脹であり、それによるＧＮＰの上昇であり、自動車販売市場の急速な拡大であり、それらを引金とする「産業連関表」全体のスケールの巨大化であった。そのことは極めて見易い。しかし人々が一斉に「便宜」を求めてその異常な膨脹過程に「参加」したことは見過ごされ易い反面である。僅か一時の「享楽」を求めて、しかも労苦のコストを払うことのない一面的な（すなわち一義的な）享楽だけを求めて「乗鞍岳」に殺到する人々の群れに較べる時、その群れの通り過ぎる傍らに人知れず横たわっていた「ハイマツ」の実態は、厳しさと軟らかさと、辛苦と素直さと、遅々たる速度と長年の持続と、といった一群の両義性を典型的に内蔵するものであった。

ハイマツの犠牲の背景にある高度経済成長と人々の意識。筆者が注目するのは、やはり対比的に書き込まれている。

①一面的な＝一義的な享楽の追求（観光客としての消費者の群れの生き方）。

②「厳しさと軟らかさ」「辛苦と素直さ」「遅々たる速度と長年の持続」といった両義性に生きること（ハイマツ的な生き方）。

⑦　こうして、人間の浅薄な「頭の良さ」がどんなものであるかが決定的な形で明らかにされた。岩山の斜面を百年にわたって匍い続けて来た一つの樹木の生活様式とのコントラストにおいて。そうしてその対照軸となったハイマツの実態を認識のレベルにまで高めたものは、人間の自己中心的な開発がもたらした「破壊」という危機の最中にあって、その犠牲をつぶさに見取るという、数少ない人の丹念な行為に他ならなかった。危機は認識のチャンスであり、その危機における認識を支える精神的動機は犠牲者への愛であり、そうしてその認識行為だけが「浅ましい人間」からの脱出と回復を――すなわち蘇りと再生を可能にする第一歩に他ならないということを、これ程如実に示す一例はそう多くはない。私も又その道を、残された僅かの年月の間、歩もうとする者の一人でありたい。此の土壇場の危機の時代においては犠牲への鎮魂歌は自らの耳に快適な歌としてではなく精魂込めた「他者の認識」として現れなければならない。その**読解問題3**認識としてのレクイエムのみが辛うじて蘇生への鍵を包蔵している、というべきであろう。

「認識」が繰り返されている。最後のキーワード。**☆キーワードは繰り返される**。認識が、回復への一歩。深く知ることが、浅ましさから逃れ出ることにつながる。主旨を端的に捉えておく。

読解問題3　「認識としてのレクイエム」に筆者はどのような意味を与えているか、本文の論旨をふまえて説明しなさい。

レクイエム＝鎮魂歌。さきほどの、「葬い」と重なる。**☆傍線部延長**で、「その認識としてのレクイエムのみが辛うじて蘇生への鍵を包蔵している」の意味を考えよう。

基本軸はもちろん、**「深く知ることが、浅ましさから逃れ出ることにつながる」**ということだ。そこに、鎮魂歌＝葬いの意味合いを重ねよう。

基本は、「その認識行為だけが「浅ましい人間」からの脱出と回復を――すなわち蘇りと再生を可能にする第一歩だ」の部分だが、「その認識行為」の指示内容を繰り込むために直前の「危機は認識のチャンスであり、その危機における認識を支える精神的動機は犠牲者への愛」の部分を生かす。ひっくり返せば、「犠牲者への愛（悼む気持ち）に支えられて、犠牲の実態を深く見つめる（つぶさに見取る）こと」が鍵だ、ということになる。

解答例「犠牲者への愛（、その死を悼む気持ち）に支えられて、犠牲の実態を深く見つめることが、浅ましさから逃れ出て、かつて生きていた両義性への感受性を回復する道につながる、ということ。」

■読解問題

1　「外界と他者に対する受容器が根本的な損傷を蒙ったのである」とは、どのようなことか。「両義性」という語に関係づけながら説明せよ。

2　「それは一つの葬いであった」とはどのようなことか。

3　「認識としてのレクイエム」に筆者はどのような意味を与えているか、本文の論旨をふまえて説明しなさい。

■**発展問題**

「他者の認識」（犠牲者の認識）というコンセプトは、きわめて重要であり、必要であり、有効であると思われる。それは何より、いつのまにか、何かの「犠牲者」にもなっている自分自身の回復の道を探るために重要である。

世のさまざまな「犠牲者」のありようを深く見つめ、そのことと自分のありようを結びつけ、気づいたことを論じなさい。

（ある事件、ある現象、その犠牲、その原因、それらに対する人々の反応、政治の反応、自分が犠牲者になった／なる可能性、本文にあるような生き方の回復の可能性……）

●重要語「開発」＝開発の根幹は資本主義にある。産業資本主義初期の英国では、海外市場が拡大したことによって毛織物の需要が増え、原料の羊毛が高騰、農地や森林が羊を飼うための牧草地として「開発」された。

資本主義は、安い原料から価値ある商品を生み出すことで回転するから、宿命的に「開発」の対象となる後発地域を必要とする。材木が必要なら、森林は「開発」される。サトウキビが原料となるなら、すべてはサトウキビ畑として「開発」され、住む者は、加工工場の労働者として賃金をもらうしかなく、自分の食糧を自給することはできなくなる。ハイマツの山は、「第三次産業」という名の資本主義の商品のために「開発」され、絶滅危惧種を生む。

今や、地球全体の「開発」が限界に達しており、その認識の上で、SDGs＝「Sustainable Development Goals（持続可能な開発目標）」などということが唱えられている。しかしその持続ということに、資本主義の持続が含まれていることに注意せよ。今や資本主義なしに人類は継続できないが、資本主義の原理そのものが、貧困や環境破壊を含め、あらゆる問題を生んでいるということを「認識」することから始めなければならない。標語より前に「認識」をというのが、藤田もいっていることである。